

建設経済常任委員会行政視察委員長報告

- 1 視察期日 平成27年10月6日（火）から8日（木）
- 2 視察地 香川県高松市、東かがわ市、善通寺市
- 3 出席委員 日高英城、北原正勝、高橋伸治、諏訪善一良、
加藤勝明、横山 功、保角美代
- 4 視察事項
 - 〔高松市〕人口 42万907人（平成27年10月1日現在）
 - ・丸亀町商店街のまちづくりについて
 - ・丸亀町商店街市街地再開発事業について
 - 〔東かがわ市〕人口 3万2,520人（平成27年10月1日現在）
 - ・特産品開発によるまちづくりについて
 - 〔善通寺市〕人口 3万2,840人（平成27年10月1日現在）
 - ・民間住宅リフォーム支援・市内商業活性化事業について
 - ・讃岐もち麦ダイシモチ普及促進事業について

以上の視察事項について、主なものを順次報告いたします。

はじめに**高松市**の視察概要から報告いたします。

（1）「丸亀町商店街のまちづくり」について

高松市内にある丸亀町商店街は、高松城の城下町に1588年誕生し、427年の歴史があります。かつては商圈が四国4県に400万人といわれ、全国でも有数の商店街でしたが、戦後の経済成長を背景に物が売れ続け、その結果店舗の入れ替えがなくなったことや、バブル期の地価高騰で人が住みづらくなり、次第に商店街が衰退してきました。

丸亀町商店街では、今から25年前に商店街の若手の人たちが他の都市の商店街の視察などを通じ、商売人が出店したくなる丸亀町のまちづくりとして、①土地問題を解決するため、定期借地権方式による土地の所有権と利用権の分離、②居住者を取り返すためのコンパクトシティ、③まちづくり会社による一括管理運営によるタウンマネジメントの実現を図るため市街地再開発事業を実施しています。

市街地再開発事業の内容としては、区域面積約4ha、組合員104名による全員同意型の組合施行とし、商店街をAからGの7つの街区に区切り、各地区にそれぞれの役割を持たせた新しい開発スキームであることから、土地の利用と区分を分離した、箱物整備ではない面としての開発として地区計画も定め実施しています。

進捗状況としては、イタリアのミラノをモデルにしたドーム広場と7つの街区のうちA・B・C・Gの4つの街区及び駐車場の整備が進んでいます。これからの事業展開としては、テナントミックスの選定基準を生活者目線で行い、「歳をとれば丸亀に住みたいよね」と言われるような街を目指し、介

護施設、市民市場、映画館、商店街町営バスの路線拡大、さらには、町営の保育所・小学校の整備も検討しており、協働によるまちづくりを推進しているとのことでした。

（２）「丸亀町商店街市街地再開発事業」について

丸亀町商店街のまちづくりに関する、高松市の係わりについて視察を行いました。

高松市では、従来から駅周辺の市街地再開発事業の検討を行っていたところ、平成2年に丸亀町商店街から相談がありましたが、丸亀町商店街における再開発事業は、当時の状況から適当な開発手法ではないという判断をしました。その後、継続して丸亀町商店街からの強い要望があり、市として丸亀町商店街を含めた市街地総合再生計画を平成5年に策定しました。

市街地再開発事業において、市が補助金を負担しているのが、A街区とG街区であり、A街区では、国土交通省所管の市街地再開発事業として、国補助金約14億円、県補助金約7億円、市補助金約7億円を負担しています。また、経済産業省所管の戦略補助金、高度化資金として、国補助金約5億円、県補助金約2億円、市補助金約1億4千万円を負担しています。

また、G街区では、国土交通省所管の市街地再開発事業として、国補助金約33億円、県補助金約12億円、市補助金約13億円を負担し、さらに、G街区では、経済産業省所管の戦略補助金のほか、国土交通省所管の都市開発資金の補助も受けており、併せて国補助金約12億円、県補助金約2億円、市補助金約5億円を負担しています。

今後、再開発事業未施工区域の実施をしていくところですが、国の補助制度もこの間変更があり、都市計画法の手法としては、地区計画、高度利用地区、再開発事業地区、都市再生特別地区の各制度の活用を検討し、市街地再開発事業を推進していく予定とのことでした。

次に**東かがわ市**の視察概要について報告いたします。

「特産品開発によるまちづくり」について

東かがわ市の地場産業は、全国の90%以上の生産を占める手袋産業をはじめ、ハマチ養殖の発祥地としてハマチ、タイ等の養殖業が盛んです。

特に、スポーツ用に至っては、ほぼ100%のシェアを誇る手袋産業の歴史は明治21年(1888年)に始まり、昭和20年から30年代には世界一の産地であったアメリカ合衆国を抜き、世界一の手袋産地となりました。

昭和37年には「日本手袋工業組合」が設立され、加盟企業数のピークは、昭和45年の248社、出荷金額については、平成3年に680億円にまで達しました。しかし、デフレや円安等の影響から25年の加盟企業数は75社、出荷金額は355億円にまで減少しています。この間、海外進出も積極的に行い、25年の海外生産比率は75.3%となっています。海外生産の拠点は、中国の人件費が上がってきたことから東南アジアへとシフトし始めています。

そもそも、手袋生産は機械化が非常に困難で、技術を持った人材が多く必要ですが、若い人たちなどの人材を確保するために人件費が高騰し、生産の拠点を海外に移したことで製造の空洞化が起きてしまいました。そのため、海外視察等の情報収集を行い、検討を重ねた結果、製品をブランド化することで、商品価値を高め、技術者の賃金アップを図ろうという結論に至りました。平成26年には東京三越日本橋本店での販売を開始し、究極の手袋（8,000円～56,000円）という高級手袋も開発したことで、新聞に取り上げられ大きな反響を呼びました。百貨店へ卸すことは個人では難しいため、組合が一括して買い上げ卸す方法を取っていますが、この方法はなかなか他では見られないものです。

次に、東かがわ市の手袋生産についての認知度を調査した結果、新宿で3%、香川県内でも35%しかなかったことから、伊藤忠商事の助言を求め、香川手袋のロゴマークを制作するなど、パブリシティ活動に力を入れています。今後は、全国主要都市の百貨店での販売を展開していき、平成28年には全国デビューをする予定とのことです。また、21年に開店した「香川のてぶくろアウトレット」は、加盟企業75社のうち31社が商品を並べ、売上も好調であり、会員負荷金と同等の額を稼ぐまでに成長しています。24年からは手袋資料館と併設され、観光産業の拠点となりうる観光施設として期待されているとのことでした。

次に**善通寺市**の視察概要について報告いたします。

(1) 「民間住宅リフォーム支援・市内商業活性化事業」について

「民間住宅リフォーム支援・市内商業活性化事業」は、同様の事業を実施している県内他団体の視察などを経て、平成26年度から実施しています。

事業内容は、市内の施工業者を利用して、自己の居住住宅をリフォームした際に、補助金を善通寺市内で利用できる商品券で交付し、併せて市内商業の活性化を図ろうとするものです。制度の特長としては、補助率が20%、上限20万円と非常に高いこと。補助金を現金で交付したり施工業者へ直接支払ったりするのではなく、市内で利用できる商品券で交付すること。補助金の申請を先着順ではなく、期間を定めて募集をし、予算を超過する場合は抽選方式とすることなどです。特に交付する商品券については、この事業のために発行する商品券で、店舗面積1,000㎡を超える大型店では利用できないことも特筆すべき点です。

成果については、平成26年度の実績で交付件数48件、交付額830万7,000円となり、予算限度額までは達しなかったものの市内消費見込額は8,640万6,000円となり一定の成果・効果が見られたということです。

課題としては、募集期間を設定しているため、リフォームを行うための日程と調整がつかず利用を断念する市民がいるということで、今後、募集期間を区切らず通年とすることが課題ですが、予算措置の難しさがあるため制度

利用状況を検証し、実施方法について検討していくとのことでした。

（２）「讃岐もち麦ダイシモチ普及促進事業」について

讃岐もち麦ダイシモチは、近畿中国四国農業研究センターで品種改良され、平成9年に誕生した裸麦のもち麦です。多くの特長を持つこの品種ですが、これまで、その活用をすることができず、生産量も種の保存のためだけではないかという程度で、作付面積も0.1haしかありませんでした。

しかし、平成24年に「株式会社まんできん」の取締役の民間から今川健二氏を招いたことで、状況が一変します。「株式会社まんできん」は、11年設立の市の第三セクターで、おしゃべり広場事業、酒類販売事業、そしてダイシモチを使った新商品開発などを行っています。

まんできん取締役の今川氏は、港の漁師に直接交渉して、おしゃべり広場で新鮮な魚を販売することなどで市民を呼び込み、ダイシモチで造られた焼酎のラベルの変更で、イメージを変え、同じ商品であるのに売上を伸ばすなど、アイデアに富んだ取り組みを積極的に行っていました。

また、香川県の糖尿病受療率が全国ワースト2位であることに目を付け、食物繊維を豊富に含むダイシモチは香川県民に売り込むのに非常に良いものだと確信し、その普及に取り組みました。ダイシモチが善通寺で生まれ、作付にも適し、有数の精麦会社があったことから特産品となる環境が整っていました。まず、地元業者と協力して、ダイシモチの関連商品を数多く開発するとともに、麦ご飯として食べてもらえるよう丸麦ご飯の加工をしました。併せて販路拡大にと、ホームセンター、ドラッグストア、美容院など、通常麦を販売するとは想定できない場所に交渉に当たりました。その目論見は見事に当たり、1kg900円のダイシモチが5～6時間で100袋も売れる売り場も出てくるようになり、そうしたことから、新聞にも次々に取り上げられ、関連商品や取引先も増加し、ダイシモチの作付面積も平成27年には20haにまで拡大、28年には30haの作付けを予定しているということです。今川氏は27年から善通寺市の産業振興部営業課長も兼務し商品の販路拡大、新商品開発に取り組んでいます。

また、ダイシモチの穂が紫色をしていることから、景観作物としての素質を持っており、それを利用してダイシモチの里を新しい名所にしようとの動きも始めています。今後は、ダイシモチを健康食材として全国展開を図り、これまでに培ったノウハウを基に新たな取り組みに挑戦していきたいとのことでした。

以上が視察の概要ですが、今後、本市において参考になる事項については、ご検討をいただきますよう要望し、報告といたします。

なお、詳しい資料は、議長への視察報告書に添付してありますので、必要な方は御覧いただきたいと存じます。

平成27年11月27日

建設経済常任委員会
委員長 保角美代

北本市議会議長 三宮幸雄様